

主 題：パウロの頌栄2

聖書箇所：ローマ人への手紙 16章26, 27節

私たちはパウロに会ったことはありませんが、みことばを通して、彼がどのような人物であったのかを少し窺い知ることができます。何度か見て来たように、彼は間違いなく自分が救われたことを神に感謝しながら生きていた人です。罪から救い出されて新しく生まれ変わった、その救いの喜びをもって生きていた信仰者です。彼はこの主なる神は栄光を受けるにふさわしいお方である、すべての称賛に値するお方であると神を讃えました。私たちは前回と今日、彼が讃えた二つのことを見ていきます。前回見たのは「神の御力」です。二つ目は「神の知恵」です。

◎パウロが讃えた二つのこと

A. その御力 25, 26節

26節に「あなたがたを堅く立たせることができる方、」と言いました。この神は私たちクリスチャンたちの心を強めて、確信をもって生きていく強い信仰者へと変えていってください、そのような信仰者へと成長させてくださる方です。どんなことがあっても信仰を失うことがない、どんなときにもその信仰に堅く立って生きていく、確信をもって生きていく、そのような者へと主は変えてくださるということです。それはすべて福音によって始まるとパウロは教えます。そのためにパウロは自分の考えや思いではなく主イエス・キリストを伝え続けていきました。「私たちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝えます。私たち自身は、イエスのために、あなたがたに仕えるしもべなのです。」と、Ⅱコリント4：5で言っているように、彼のメッセージはイエス・キリストを伝えるメッセージでした。イエス・キリストのことを明らかにするメッセージでした。また、Ⅰコリント1：23でも「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、」と語っています。私がどう思うかとかどう考えるかという人間の考えではなく、イエス・キリストを伝えることが私の務めであると言うのです。まさに、そのようにパウロは主イエス・キリストのことを語り続けていました。

そのパウロがこのように言います。この福音の真理は実は奥義であった、つまり、旧約の人々には隠されていて、彼らにはよく分からなかったことであると。「この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。」とパウロがエペソ3：5で言うように、確かに、旧約の人々は預言者からいろいろなメッセージを聞いてはいましたが、新約の人たちが知っているほど正確に明確に知ることがなかったのです。パウロはここで「奥義の啓示によって」と言っています。今も話したように、旧約の時代においては人々に知らされていなかったことが、新約の時代に明らかにされたということです。新約の時代に、神のすばらしい恵み、真理が明らかにされたのです。特に、イエス・キリストを通して罪人が救われるという神の救いのご計画は、旧約の人たちはそのすべてを知っていませんでした。しかし、神が働いてその真理を明らかにされたのです。

興味深いことは、この26節に「永遠の神の命令に従い、」ということばがあることです。このように人々の前に真理を明らかにするということは、人間が賢くなったからではありません。神がそのようにお決めになったからです。神がこの真理を人々に明らかにしようとしたゆえに、人々はその真理を知ることになったのです。ですから、「啓示」と言ったとき、神が明らかにされた、神が働かなければ知ることの出来なかった真理を人々に明らかにされたという神のみわざは、すべて神のご計画によっているとパウロは教えるのです。神の摂理に基づいてすべてのことは導かれているのです。いつこの預言が成就するのか、そのすべては神の御手のうちにある、それほど偉大な神なのです。

何となく、結果的にそのようなことをしてしまったとか、自分の思いとは違うことが行なわれてしまったということは、この神には決してないのです。すべてのことは神のみこころのままになされているのです。パウロはそのことを覚えてそのことを神に感謝するのです。

◎福音によって救われたこと

福音によって、それを信じる者は救いに与るのですが、その救いに関してもパウロはその明確な定義を私たちに与えています。26節に「信仰の従順に導くために」とあります。もし、私たちがキリストにある救いをひと言で表現するなら、まさに、このことばです。神の恵みによって救われた人は、神に従順に生きる者です。それがクリスチャンです。神に逆らっていた者がその罪を悔い改めて神の救いをいただき、神に従う者へと生まれ変わった、これが救いです。パウロはそのことをこのローマ書の最後のと

ころでも示しています。ですから、たとえ「イエス・キリストを信じる」と口で言っても神に従ってなければ、その救いは本物であるかどうかは分かりません。実際に、イエスご自身が、イエスを信じたと言っていたユダヤ人たちに対してこのような厳しいことを言っておられます。ヨハネ8：47「神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」と、みことばははっきりしています。

神が救いを与えた人は生まれ変わるのです。神に不従順であった者が神に従順な者として生まれ変わる、これが救いです。イエス・キリストを信じた人も失敗します。神のみこころを聞いてそれを行なっていこうと決心しても失敗します。それでも、神が命じておられるようにその罪を告白して、主に従い続けていこうとします。それはその人が救われていることの証拠です。そのようにして私たちは生きていますし、そのように皆さんも歩んで来られたはずですよ。ですから、神の真理を聞き、その真理に対して悔い改めをもってイエス・キリストを信じ、そして、主に従う者として生まれ変わった私たちが主に従い続けていくなれば、私たちはその従順によって信仰の成長を経験するのです。信仰が成長することは、まさに、確信をもって生きる信仰者へと変わっていきます。どんなことがあっても、主はこう言われたから私はそれを信じるという主に対する強い確信をもって生きる者たちです。私の肉がそれを疑うようにと働きかけたとしても、「神はこうおっしゃっているゆえに私は信じるのだ。」とそのような主に対する強い確信を持った信仰者へと私たちは変えられていきます。そのように主は私たちのうちに働いてくださるのです。

でも、その信仰が成長するために必要なことは「主に従い続けていくこと」です。そのことなくして私たちの信仰の成長を見ることは出来ないのです。失敗したならそれを神の前に告白してもう一度始めることです。また失敗したなら告白してまた始めることです。主に従うことによって私たちの信仰は成長します。その例をパウロが上げています。Ⅱテサロニケ1：3-4にはパウロがこのテサロニケのクリスチャンたちを称賛している様子が記されています。「兄弟たち。あなたがたのことについて、私たちはいつも神に感謝しなければなりません。そうするのが当然なのです。なぜならあなたがたの信仰が目に見えて成長し、あなたがたすべての間で、ひとりひとりに相互の愛が増し加わっているからです。」と、このように「あなたがたの信仰が目に見えて成長し、」と、そのことをパウロは神に感謝したのです。では、どのようにして彼らの信仰が成長したのでしょうか？4節を見ると「それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えながらその従順と信仰とを保っていることを、誇りとしています。」とあります。確かに、彼らは信仰ゆえに様々な迫害を困難を経験しました。でも、その中にあっても彼らは神に従い続ける選択をしそのように歩み続けたのです。だから、彼らの信仰は成長していたのです。それしかないのです、皆さん、あなたの信仰が成長していくためには神のみことばをしっかりと学び、その真理に従って行くことです。そして、感謝なことに、神はそれを助けてくださる。そのようにあなたが歩んで行けるように神はあなたを助けてくださるのです。

そうしてみことばに私たちが従って行くことによって、私たちはみことばに対する、また、主に対する確信を増し加えていきます。みことばをただ聞いているだけなら「なるほど！」と思っても、それが試されると私たちはいろんな不安を抱いてしまいます。「本当かな？…」と。しかし、その中で私たちは神がおっしゃったのだからと確信をもって信頼をもって生きていく時に、その通りに導かれていくから私たちは「確かに、神がおっしゃったことはその通りになる。」という確信をもちます。そのようにして私たちの信仰は成長するのです。ですから、ただみことばを聞くだけではダメなのです。エマオ途上にあつた二人の弟子たちはどうでしたか？彼らはみことばを知っていました。しかし、実際にそのことが起こった時に、イエス・キリストが十字架に掛かってよみがえった時に、彼らはそれを信じるのが出来なかったのです。そこでイエスが彼らに言われたことは「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。」（ルカ24：25）でした。聞いてはいました。知っているとも彼らは告白したでしょう。でも、彼らはそのことを信じていなかったのです。神のみことばに対して私たちの信頼が増していくためには、神が言われたことを実践すること以外にそれを学ぶ方法はありません。感謝なことに、神は私たちをときどき神を信頼しなければいけない境遇に置かれます。そうして私たちにレッスンを学ばせてくださるのです。神に信頼することがどんなにすばらしい特権なのか、そのことを教えてくれるのです。私たちの神がどんなにすばらしいお方であるかということ、私たちはそのレッスンを通して学んでいくのです。でも、カギは神が言われたことを信じるというその信仰です。

みことばの実践を通して私たちは、その神に対する確信を増していきます。そこでパウロはピリピの教会に対してこんなことを言っています。ピリピ2：12「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いを達成してください。」と。あなたがたはいつも従順に歩んで来た、でも、今、私はあなたたちといっしょにはいな

いけれど、同じように従順であり続けてくださいというパウロの願いがここに記されています。「恐れおののいて自分の救いを達成してください。」とありますが、この「救い」は罪からの赦しのことではありません。神の敵であった者が救われて神の味方となり神の子どもとなる、その罪からの救いのことを言っているのではないのです。これはクリスチャンとして救われた者たちの救いのことです。クリスチャンとして救われた者たちが益々キリストに似た者に変えられていくこと、聖化のことです。よりキリストに似た者に変えられていくために何が必要か？みことばに従い続けていくことです。なぜなら、その時にあなたの信仰は成長し、あなたは益々キリストに似た者に変えられるからです。そのことをパウロは「自分の救いを達成してください。」と言ったのです。

ですから、パウロは私たちにしっかりとみことばに従い続けていくようにと教えるのです。この福音、神の奥義であった福音、今、私たちの前にそれがすべて明らかにされたのです。恐らく、私たちが知っていることをどれ程旧約の人々は知りたかったことでしょうか？さて、この「奥義」について、実は、福音だけではありません。旧約の時代にはよく分かっていたことが、新約の時代に明らかになった奥義が、実は福音以外にもあるのです。次に進む前に、いくつか皆さんに紹介しておきたいと思います。

◎奥義について

1. イスラエルのこと

もうすでに見て来たように、ローマ人への手紙 11 : 25 に「イスラエル人の一部がかたくなにされること」も実は奥義であると教えられています。「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を買いとすることがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、」とあります。つまり、旧約の人々には神が教会をお建てになることや、異邦人が救われるということは知らなかったのです。しかも、このイスラエルの一部の人々が心をかたくなにして救世主に背を向けることも知らなかったのです。でも、現実を見ると、確かに、イスラエル人の一部は心をかたくなにして救世主に心を閉ざしています。今でもイスラエル人たちの多くは救世主を待っています。みことばはそのように教えるのです。でも、それはいつまでも続くのではなくて「異邦人の完成のなる時まで」、つまり、異邦人の最後の人が救われたらそのすべてはまた変わる、また神はイスラエルに対してすばらしい働きを始められると言うのです。ですから、奥義とは、ローマ書 11 章ではイスラエル人の一部がかたくなにされること、これも実は旧約の人々がよく分かっていた奥義であると教えるのです。

2. キリストと教会の関係のこと

これも旧約の人たちが知らなかった奥義であると言います。エペソ 5 : 32 「この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。」とあります。パウロはここでこのように教えたのです。イエス・キリストを信じた人々はイエスと一つにされたということです。ちょうど、夫婦が一つにされたように。だから、私たちクリスチャンのかしらはイエス・キリストで、私たちはそのキリストのからだです。こうして、イエスを信じる者たちがイエス・キリストと一つにされたということを教えています。実はこれも旧約の時代の人々が知らなかったことです。

3. キリストにあってみな一つとされること

同じエペソ人への手紙 3 章に書かれています。ユダヤ人であろうと異邦人であろうとイエスを信じることによって神の家族に属する者になる、兄弟姉妹になるということです。エペソ 3 : 6 「その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。」、 「その奥義とは、」とパウロは説明を加えました。この福音によって異邦人もユダヤ人も一つのからだになると言います。また、I コリント 12 : 13 にも「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」とあり、救いに差別はないと言うのです。人種的、身分的な差別はないのです。イエス・キリストを信じることによってみな一つの家族に属するということです。このことは旧約の人々はよく分かりませんでした。と言っても、旧約聖書には異邦人が救われることが教えられていなかったのでしょうか？アブラハムの契約の中にちゃんと教えられています。でも、彼らはその教えを聞いてもよく分かっていたのです。今でこそ私たちははっきりとそのように断言することができます。神がその奥義を明らかにしてくださったからです。そして、今私たちは人種に関係なくイエス・キリストによって信じるすべての者は一つになるということを告白することが出来るのです。

4. イエス・キリスト

イエス・キリストのことが奥義であると聖書は教えます。コロサイ 1 : 27 には「神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあるように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」とあります。つまり、奥義とは内住して

いるキリストだと言うのです。同じコロサイ 2 : 2 b—3 に「…神の奥義であるキリストを真に知るようになるためです。:3 このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」とあり、パウロはここでキリストが奥義であったと言うのです。つまり、キリストのことを人々はよく知らなかったと言うのです。しかし今、このキリスト、救い主がだれなのか、どのような方なのか、そのことがはっきりしたと言うのです。2 節の後半に「神の奥義であるキリスト」と書かれています。パウロは「キリストは神だ」ということを言いたいのです。イエスは神だと言うのです。異端は一生懸命イエス・キリストは神ではないと教えます。みことばは「イエスは神であった。神である。」ということ明らかにします。「キリストは神の奥義であった」、すなわち、隠されていた神、人間には知ることのできなかったその神が、キリストによって明らかにされたと言うのです。まさにそうです。神は霊ですから私たちはその方を見ることも、その方を知ることにも限界がありました。でも、イエス・キリストが人としてこの世にお見えになることによって、我々は神がどのようなお方であるかということを実際に見ることができたのです。神の奥義であった、隠されていた方がイエスによって明らかにされたということです。

◎パウロはキリストがだれであるかをはっきりと教えている

(1) 「神の奥義」

だから、イエスはこのように言われました。弟子の一人のピリポが「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」と質問したとき「イエスは彼に言われた。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。」と。ヨハネの福音書 14 : 8—9 です。なぜ、イエスがこんなことを言われたのかは明らかです。「わたしを見た者は、父を見たのです。」と「わたしが神だ」と言っているのです。わたしを見ることによって、神がどのようなお方であるかをあなたは知ることが出来る、だから「私たちに父を見せてください。」などと言うのか、ずっとわたしを見て来たではないかと、そのようにイエスはお答えになったのです。

(2) 「キリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」

また、先程から見ているコロサイ 2 : 3 には「このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。」とあり、キリストは奥義である、よく知られていなかった、でも、今新約の時代になってそれが明確にされたということです。「キリストは神の知恵である」とパウロは言います。つまり、この方は真理を教えてくれる方だと言うのです。私たちはいろんなことに一生懸命答えを探って来たのですが、その答えを知ることはなかったのです。私たちはどこから来たのか、なぜ、生きているのか、どこに行ってしまうのか？例えば、このようなことに対しても人々はいろんなことを言いました。でも、私たちは聖書のみことばを通してその真理を知りました。我々は神によって造られ、神によって生かされ、そして、私たちは肉体的な死を迎えた後、創造主の前に立つということ、このような私たちが知らなかったことを明らかにしてくださるのです。まさに、キリストは神の知恵である、私たちにこのような真理を教えてください方です。

ローマ書 11 : 33 に「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」とあります。もちろん、私たちはそのすべてを知る訳ではありません。しかし、今我々がイエス・キリストを知ることによって、主が私たちにこのような神のご計画、お考えを私たちに教えてください方です。だから、私たちはしっかりとみことばを学ぶのです。みことばを通してそのことを神は教えてください方からです。

さて、パウロはこの神のその力ゆえに「私はこの方を誉め称える」とそのように告白しました。

B. その知恵 27 節

二つ目にパウロが言うのは「神の知恵」です。27 節に記されています。「知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。アーメン。」、その知恵ゆえに私はこの方を心から誉め称えたいと言います。神の知恵、それを覚える時にパウロはこの方を誉め称えたいとそのように告白したのです。I テモテ 1 : 17 でもパウロはこのように言っています。「どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。」。神の知恵を知れば知るほどこの方を誉め称えなければならないと。

1. 創造による証明

神の知恵は創造によって証明されるものです。神がお造りになったものを見ることによって、私たちはそこに神の知恵を見出すことができます。詩篇 19 : 1 に「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」、神がお造りになったすべてのものは造り主なる神の偉大さを示していると言います。私たちは神がお造りになったこの自然のいのちあるものを見る時に、そこに神のすばらしさを見ます。私たちのからだを見ても不思議だらけです。どうしてこのように物を記憶することが出来るのか？なぜ、私たちはこのようにものを感じる事が出来るのか？なぜ、私たちは神を求める存在なのか？神はそれ

を私たちに教えてくれます。「なぜなら、わたしがそのように造ったからだ。」と言われます。私たちのからだは造られたその仕組みを見る時に、私たちはこれを造られた神の偉大さを覚えます。神がお造りになったこの自然界のすべてのものを見る時に、私たちはそこにある神の知恵に圧倒されます。

この宇宙、自然界に存在する法則を見る時に、余りにも偉大すぎます。海に潜ってその小さな生き物を見る時に、そこにも神のすばらしい知恵があふれています。自然界を見る時に私たちは「なぜ…？」という質問が次から次へと出て来ます。そのすべては私たちに教えるのです。これらすべてをお造りになった神は何と知恵のあるお方であるかと。

だから、詩篇148：13にこのようにあります。「彼らに主の名をほめたたえさせよ。主の御名だけがあがめられ、その威光は地と天の上にあるからだ。」と。この「彼ら」とは7節から12節に記されている「すべての神によって造られたものたち」のことです。そのすべての被造物によって「主の名をほめたたえさせよ。」と言うのです。そして、すごいことに神によって造られたすべてのものは神のすばらしさを証しているのです。本来なら、私たちもそのために造られているゆえにその目的のために生きるはずですが、ところが、問題は神の栄光のためではなく自分のために生きることです。救われていながらも、私たちはその造られた目的を見失ってしまうなら、私たちは間違ったことのために生き始めます。パウロは神がお造りになったものを見る時に、そこにすばらしい神の知恵を見、そして、その知恵のある神を大いに誉め称えたのです。

2. 救いによる証明

神の知恵は創造物だけに示されているのではありません。「救い」においても神の知恵を見ることができ、救いが神の知恵を証明してくれています。Iコリント2：7に「私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。」とありますが、よく考えなければざっと読んだだけではここで言われている意味が分かりません。パウロはここで「神の知恵、福音の知恵」ということについて教えるのです。パウロは「隠された奥義としての神の知恵」と言って説明しています。「神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。」と。パウロがここで言っていることは、神ご自身の栄光を現わすために神は私たちが救われ、しかも、それは神が世界を造る前から神の計画の内であったということです。

神は世界を造る前から、あなたを選び、あなたを通してご自身の栄光を現わそうと決めておられたというのです。世界を造る前からあなたを選んでいとエペソ書1章に記されていますが、まさに、ここでもパウロは同じことを言っているのです。神の栄光を現わすために生まれ変わった皆さん、あなたがこの救いに与ったのは、神が世界を造る前から神によって決められていたこと、神ご自身があらかじめ決めていたものだというのです。恐らく、皆さんも何度も経験されたと思います。繁華街に出て何千何万という人々がいる中であって、果して、この中で何人の人が私が与っているこの救いに与っているだろう？このような恵みに与っているだろう？と。学生時代私は、恐らく1500～1600人位の学生たちの中であって、ここにクリスチャンとしているのは私一人だけだろうと考えました。それが私たちの国の現実です。そのことを考えると、なぜ神がこんな罪深い愚かな者を選んでくださったのか、不思議です。皆さん、思いませんか？どうして神はこのような者を救ってくださったのか？みことばは神は世界を造る前からそのように決めていた、神がそのように計画されていたと教えます。あなたがこの世に誕生する前からです。パウロはそのことを知ってこの神を称えたのです。

また、Iコリント12：9でイザヤ書64：4のみことばを引用して次のように言います。「まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」と。救われた者たちのために神が備えてくださったもの、それは私たちの理解をはるかに超えたものだとパウロは言います。私たち以上に神は私たちのことを分かってくれているのです。あなたの必要に関しても神はあなた以上に分かっているから、だから、神は聖霊なる神をいつもあなたとともにおいてくださったのです。なぜなら、聖霊は助け主です。あなたはいつも助けが必要だからです。イエスご自身が「わたしは決してあなたを離れず、あなたを捨てない」と言われました。「世の終わりまであなたとともにいる。」と。なぜですか？私たちは弱いからです。神は私たちの弱さや愚かさを知って、そして、神は私たちが正しく歩んで行くことが出来るように、すべてのものを備えてくださったのです。それだけを考えるだけでも、私たちはこの神の知恵に圧倒されます。いったいどれ程私のことを知っておられるのか？どれだけ私のことを分かっておられるのか？パウロはそのことを知っていました。ゆえに彼はこの神の知恵を覚えてこの神を崇めるのです。「私がこの頭でとても理解することの出来ない方、それが私の神だ。」と。神の為さったこと、為さること、これから計画されていることは私の考えをはるかに越えていると。でも、分かっていることは、神は常に最善しかなくということ。このような真理は間違いなくパウロにとって大きな確信でした。こんな神によって私は守られている、こんな神によ

って私は支えられている、こんな神が私を導いてくださっていると…。これ以上何が必要ですか？そのことを覚えるだけでも私たちはこの神に対して感謝をささげるのです。

C. 頌栄 27節

1. イエス・キリストによって

ですから、最後の27節に頌栄が出て来ます。「…イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。アーメン。」、「頌栄」ということばは私たちは余り聞いたことがないでしょう。辞書を見ると「特に、プロテスタントの教会にあって三位一体の神を称え、栄光を神に帰する歌である」と定義されています。パウロは神を心から誉め称えるのです。ここに「イエス・キリストによって」と記されています。それはこの神の愛、恵み、救いが主イエス・キリストによって示されたからです。Ⅱテモテ1：9-10にはこのように記されています。「神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、：10 それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現われによって明らかにされたのです。キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。」

2. 御栄えがとこしえまでありますように

パウロはこの福音のすばらしさを知っていたゆえに、この福音を与えてくださった神を誉め称えました。実は、このように神に対して賛美をささげることは、ここだけに記されているではありません。パウロは何度もこのように神を称えています。たとえば、Ⅰテモテ1：17にも「どうか、世々の王、すなわち、滅びることなく、目に見えない唯一の神に、誉れと栄えとが世々限りなくありますように。アーメン。」とあります。というのは、パウロ自身、神のすばらしさを思った時に、その内側から出て来たことは神への賛美だったのです。パウロは最後に「御栄えがとこしえまでありますように。」と言っています。「あなたがたを堅く立たせることができる方、…：27 知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。」と、「永遠にあなただけが誉め称えられますように」とパウロは言うのです。なぜなら、これらすべての恵みはこの方が私に、そして、あなたに与えてくださったからです。この方だけがこんな祝福をくださったから、この方だけが神だから、この方にのみ称賛がありますようにと。

今、皆さんに一つしていただきたいことがあります。このローマ書16章の25、26、27節をよく見ていてください。今、私は別の箇所を読みます。それはよく似ているのでよく見ていてください。

「：1 神の福音のために選り分けられ、使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロ、：2 —この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、：3 御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、：4 聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。：5 このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。それは、御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためなのです。：6 あなたがたも、それらの人々の中であって、イエス・キリストによって召された人々です。—このパウロから、：7 ローマにいるすべての、神に愛されている人々、召された聖徒たちへ。私たちの父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安があなただけの上にありますように。」、この箇所が最後のところに出て来ていませんか？今、読んだのはローマ書1：1-7です。そこで強調されていたことが再びこの手紙の最後に強調されているのです。1：1-7では「この偉大な神からの祝福があるようにと」祈ったのです。そして、最後にはパウロは「この偉大な神に祝福があるように」と神の御名を誉め称えているのです。この偉大な神からあなたたちに祝福があるように、そして、最後には「すごい神だ、すばらしい神だ、どうか、あなたにだけ栄光がありますように。」と、そのようにパウロはこの神に賛美をささげるのです。

ですから、このような頌栄、神への心からの賛美というのは、先ず、一人ひとりが主のみわざを覚えるところから始まります。神がどんなことをしてくださったのか、それを覚える時に私たちのうちにはその方に対する感謝が沸き上がってくるはずです。そして、その感謝が賛美へとつながっていきます。ですから、パウロはこのローマ書を通して、私たちがいかに罪深い存在であるかということをお教え、そんな私たちに神がどんな祝福を与えてくださったかを教え、我々の行ないによるのではなく、神を信じる信仰によって救われること、そして、救われた者は絶対にその救いを失うことがないと、神のみわざ、神の約束を明らかにしたのです。それを知った者たちは「神さま、心からあなたに感謝します。」と、そして、心からこの神のみわざに感謝している者たちはこの神に賛美をささげる者たちとして生きていくというのです。

ヨハネの黙示録の中に、天で何が起きているのかが記されている箇所が幾つか出て来ます。実は、黙示録の4章で、ヨハネは天へと引き上げられるのです。そして、そのときにこれから先に何が起こるかを見せられるのです。これから見ることはまだ先のことです。でも、このようなことが天で起こるとヨハネは示されたのです。それを実際に目撃することになったのです。黙示録4：8-11「この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続け

た。…」と、これは天使のことです。そして、「周りも内側も目で満ちていた。」というのは、この天使はすべてのことを監視している、すべてのものを見ているということです。もちろん、神と同じではありませんから、神のように全知だと言っているではありません。天使は何をしているのか？「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」と神を称えているのです。「：9 また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、：10 二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、」とあります。この「二十四人の長老」とはだれのことでしょうか？救われた者たち、教会時代のクリスチャンのことです。そして、彼らは「永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。：11 「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」と神を賛美するのです。このような賛美は5章にも7章にも記されています。7：9-12「その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手にとって、御座と小羊との前に立っていた。：10 彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。：11 御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物との回りに立っていたが、彼らも御座の前にひれ伏し、神を拝して、：12 言った。「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、永遠に私たちの神にあるように。アーメン。」

このように、天にあって人々は神を称えているのです。天使たちも、そして、救われた者たちも神を誉め称えているのです。それがヨハネが実際に見せられた光景でした。天にあっては救われた者たちが心一つにして神を称えているのです。感謝なことに、私たちもそこに加わるのです。

でも皆さん、問題はこの地上なのです。私たちは天にあってこの神を誉め称えます。しかし、神を誉め称えるのは天に行ってからではないのです。今、この地上においてです。今この地上にあって、私たちは神を誉め称える者として生まれ変わり、生きています。問題はそれを私たちがしているかどうかです、天にあって人々がしているように、神に対する感謝を、神に対する賛美を今地上にあって私たちクリスチャンが、心から主にささげ続けているかどうかなのです。

もう、私たちはみことばを通して何度も神が何をしてくださったのかを見て来ました。どんな神であるかを見て来ました。もし、私たちがその神に感謝していないとするなら、いったい、どうしたことでしょう？なぜ、このようなすばらしい恵みを、一方的に犠牲をもってあなたのために払ってくださった神にあなたは感謝をささげないのですか？なぜ、神によって救われたことを喜んでいないのですか？それには二つの理由があります。一つは、あなたのうちに罪があって、そのすばらしい喜びを感謝できなくなってしまっているからです。もう一つは、救いに与っていないことです。

罪が赦されたこと、主なる神がこの救いへとあなたを招いてくださったこと、あなたをこの救いへと選んでくださったこと、あなたのために主イエスがいのちを捨ててくださったこと、主イエスはあなたの身代わりとしてあの十字架に掛かり、あなたのさばきを身代わりに受けてくださったこと、主なる神の子どもとされたこと、主なる神が天国に喜んであなたを迎えてくださること、そして、救いを与えてくださったこの主なる神にお会いできること、この約束はイエスによって救われたあなたに与えられたものです。この祝福はあなたに与えられたものです。どのようにその祝福に対してあなたは応答されますか？パウロはこの方を誉め称えたのです。「神さま、あなたにだけ栄光がありますように。」と。もし、この中にこの救いに与っていない人がいるなら、今、私たちが見て来たような祝福はあなたのものではないのです。却って、あなたに約束されているのは神ののろいであり、永遠のさばきです。だからあなたは今、罪を悔い改めてこの救い主に救いを求めて出て来ることです。救われている皆さん、私たちはこの神のすばらしさを誉め称え続けていくために今日生きています。もし、何か問題があるならば、どこから落ちたのか、どこでつまづいているのか、しっかりと自分の歩みを振り返ることです。立ち帰ることです。なぜなら、確かに、この神は称賛に値する方です。この方は確かに、すべての被造物から誉め称えられるに値するお方です。確かに、この方は私たちの賛美をお受けになるにふさわしい方です。

皆さんに、トーマス・ケンという人物を紹介したいと思います。17世紀の英国国教会の主教でした。この人物は神を愛し神の前に正しく生きていきたいとそれを願い、そして、どんな時にも勇敢に信仰者として生きた人物です。彼はオランダのハーグで、宮廷の英国人のチャプレンとして仕事をしていました。しかし、権力者たちの自堕落な生活を彼は見ていられなかった。そして、彼はそのような生活を非難するのです。「間違っている、それは罪だ。」と。その結果、彼は退職を強要されました。イギリスに戻った後、彼は国王チャールズ二世によって彼自身のチャプレンの一人として任命されるのです。恐らく、大変名誉ある仕事に就いたのでしょう。ところが、彼は同じように罪を見て見ぬふりは出来なかった。神を恐れるがゆえに、その罪を明らかにするのです。彼はここでも同様に、ふしだらな英国王室の道徳的罪を果敢に責め続けるのです。いのちを狙われるようになったとも言われています。このよう

に神を愛し神に従って行こうと忠実に歩いて行こうとしたトーマス・ケン、彼はある曲を書いています。最近、私たちは歌わなくなったのですが、このような歌詞です。「天地こぞりて 畏み称えよ、御恵み溢るる 父、み子、御霊を、」と、頌栄です。讚美歌539番は彼の作です。オリジナルの歌詞はこのようなになっています。「すべての祝福の源である神を誉め称えよ、この地上のすべての被造物よ、神を誉め称えよ、天にいる天使たちよ、彼を誉め称えよ、父を、子を、そして、聖霊を誉め称えよ。」。彼はそのことを願ってそれにふさわしく生きたのです。神に感謝をしながら生きたのです。神を誉め称えながら生きたのです。

あなたはどのようにして信仰者として歩いていらっしゃるでしょうか？パウロはこの最後の最後に、神を誉め称える頌栄を記しました。彼が私たちにチャレンジすることは「神によって救われた者たちよ、神を誉め称えながら生きていきなさい。神に感謝をささげながら生きていきなさい。」です。そのような生活をあなたは今日から始めませんか？このローマ書を終えるに当たって、最もふさわしい終わり方だと思います。この頌栄を今からごいっしょに賛美しましょう。

《考えましょう》

1. 信仰において成長するためには、我々は何をしなければなりませんか？
2. 「神には、我々の理解を超えた知恵がある。」という事実は、どのような確信をあなたにもたらずでしょうか？それは日々の生活にどのような影響を及ぼすと思いますか？
3. 主を誉め称えながら日々を過ごすキリスト者となるために、あなたはどうすればよいと思いますか？